

らい 来ぶらり

1

いちばん悲しいこと

図書館長 波多野里望

図書館にとって

“いちばん悲しいこと”って
いったい、何だろう？

「そりゃあ、本が少ないことに
決まっているじゃないか」
おそらく、ほとんどの人が、
こう答えるにちがいない。

たしかに、
本が少ないというのは、
図書館にとって悲しいことであり、
恥ずかしいことでさえある。

しかし、はたして、
それが“いちばん悲しいこと”だろうか？
私は、そうは思わない。
なぜなら、
学生を主な対象とする図書館にとって
“いちばん悲しい”のは、
けっして、本が少ないこと自体ではなく、
むしろ、本を借りる学生が少ないことだと、
かたく信じているからである。

ところが、残念なことに、
本学の中央図書館の現在の貸出し数は、
1日平均わずか90冊。
1人が1冊ずつ借りたとしても、
借りた人の数は、
学生総数の1.5%にもみえない。

これは、

図書館にとって悲しむべきことであるだけでなく、
大学にとっても憂うべき事態であるといえよう。

そこで、図書館としては、
学生諸君と図書館との間の距離を
ほんの少しずつでも縮めていくために、
今までの工夫・努力に加えて
さらに、いくつかの新しい企画を
積極果敢に試みることにした。

その第1弾が、6月から発足した
「文献の求め方シリーズ」である。

さいわい、
定員の2倍以上もの申込みがあったから、
これが軌道に乗れば、
図書館を利用する学生がふえるだけでなく、
卒論やレポートの質も
飛躍的に向上することであろう。

そして、新しい試みの第2弾が、
この「来ぶらり」である。
残念ながら2色刷りだから、
「虹の架け橋」と呼ぶには気がひけるが、
リッチな情報のつまったこの超ミニコミ誌が、
学生諸君の良き友となり、
ひいては、諸君の足を
文字どおり「ぶらり」と図書館に向けさせる
ひとつのキッカケとなることを、
心から願ってやまない。

私はヒースクリフを 見てしまった

イングランドのヨークシャー地方の暗い厳しい自然を私は知らない。だが、一度も行ったことのない遠いその地に、私はいつとき生きたことがあるような気がする。魂の極限を生き続けたと言ってもよいキャサリンとヒースクリフに出会ったとき、なぜか私は男でありながら、キャサリンとして、ヨークシャーの荒野でヒースクリフを見つめていた。そこで破滅への道を歩みながら、あまりにも純粋で美しいヒースクリフの存在が大きいのしかかってくるのを感じていたのだと思う。

中学生時代に読んだはずのエミリー・ブロンテの『嵐が丘』に、私は特別の印象を持つてはいなかった。はたちを過ぎたばかりの頃、ふとした無為のときにこの本を手にして、「私はヒースクリフなの」というすばらしい言葉に出会って慄え上ったのを覚えている。

必要な知識を得ようと、調べものとして本を手にしなければならないことが多くなって、こうしてのめり込めるような読書の機会が少なくなると、しきりにこんな事を思い出す。けれども、物ごとや、現象を理解したいと思うときでさえ、知的な理解を求める前に、私は私なりの感情の世界でまずそれを理解したいと思う事もまた多い。

あまり意識もせず、行きあたりばったりの読書を続けてきたが、ふとこれでいいのかな、と不安になることがある。読書法とか読書の技術といった本が多く出版され、近頃はこれが意外に売れていると言う。やはり自分の勉強の方法や読書の態度について、たえず気にしている人たちが多くいるからなのであろう。そこでこの種の本を読む事になる。だが、たいへんは失望する。読書法を書こうなどという著者は、普通以上の「本読み」である場合が多く、しかもそこで語るのは、著者の読書体験にほかならないから、これを読む者は「わたしには、とてもそんなことはできない！」とつぶやいて、ますます不安にかられてしまう。すごい奴がいるなあ、という感慨の中で、かえっ

て読書がわからなくなる。方法とか技術とかいっても、それは著者の数だけあるのだから、あまり気にする事はないと納得しても、やはり不安で、何か盗みとるものはないかと、また「読書論」を手にする。そこで改めて驚く。自分と異なる物の見方、理解の仕方に出会うという事は、とても大切なことだと思うし、かえって、そうだそうだとうなずきながら終わってしまうような本は、読み易いが、読まなかったのとあまり変わらないのではないだろうか。

私も少年時代に人なみの恋をした、と自分では思っていた。そしてヒースクリフを見てしまった。そこには常識の世界から見れば、悪魔的とかえ言えるような愛があり、男と女の愛は、それが純粋であればあるほど、相手を傷つけ、自分を傷つけ、その痛みの中でこそ持続し、やがて燃えつきてしまうものだということを知ってしまった。男と女の間には、永遠の愛などあり得ないと、そこから読みとったのは私であり、そのときから、私は幸せそうな愛だとか恋がほとんど信じられなくなった。そういう毒を第一級の作品と言われる程のものはみんな持っている。だからと言って、『嵐が丘』を読んだ人みんなが同じ毒にやられるなどということもまたない。それを読む人のこれまでの経験とか、読んでいる時の、その人の置かれた状況などによって読みとるものは異なるはずで、こうした感動とか、印象に残る読書体験はタイミングの問題だと思えば、どんな本を読んだとしてもその機会はあるに違いない。『三国志』を読みながら、広大な中国大陸を駆けめぐる経験は得難いものである。二ヒルに生き続けることのつらさを『眠狂四郎』に読みとるのもまた無駄ではない。

年齢を重ねてゆくにつれて、本を読んで感情が昂ぶるというような機会に巡り会うことが、だんだん少なくなってゆく。わけ知りの大人になってゆくのは哀しいことだが、これも致し方のない事なのかもしれない。振り返ってみると、私ひとり精一杯生きてきたつもりでいても、ひとりの人間が経験できることはほんとうに少ない。若い日にヒースクリフを見てしまった私は、幸せなのか不幸なのか、それはわからない。だが、現実の世界では、とうてい経験できそうにない強烈な経験をすることができた。それは確かな事であって、悔いなどあろうはずがない。

(佐野 眞)

欠号を追いかけて

昭和60年完成予定の「学術雑誌総合目録と文編」収録タイトル数は4万とか。ほぼこの25分の1種にあたる和雑誌と外国雑誌数百種とが、逐次刊行物系の周辺で処理されています。その大半は、開架室や書店で皆さんの目にふれることのない学術刊行物—大学間の交換資料として発行される紀要類—で占められます。また中央館には、学部学科図書室から漏れこぼれるPR雑誌なども丹念に蒐集保存しなければならぬ一面もあります。毎日押し寄せるように到着する新着号を迅速に欠号なくカウンターにパトンタッチすることが裏方に徹するものの任務であり、ささやかな生甲斐ではありませんけれども、現実には未着欠号があとを絶ちません。しかも欠号が利用者に請求されることがなぜか非常に多い。対策としては「鳴かせてみせる、鳴くまで待とう」の両面作戦で執念深く手を打っていく。「鳴かざれば殺してしまえ」はありえ

ないのです。また多種多様であっても、一つ一つは集団の中の個ですから切り捨てるわけにはいきません。けれども努力空しく欠落部分が残っていくのは、原因が多様なだけにやむをえないのかも知れません。

そんな中でも、稀には劇的な解決をみるものもあります。3年ほど前、文芸誌Sの第X号が所在不明になりました。話題作が掲載されたので発行元にもとうに在庫切れ、古本屋さんでもどうやら無理らしい。区立図書館に、廃棄する際だけはないかと頼みましたが、いかにもお役所らしい答え方で断わられてしまいました。一応欠号のまま仮製本しておきました。それから何ヶ月もたってから、補充のため借りてきてコピーをとり終えた翌日だったと思います。定年で今年退官されたT教授が御寄贈下さった図書の中に、S誌のバックナンバーが含まれているのを見つけました。偶然通りがかった書庫の薄暗い片隅から、X号は私の目に、生きているもののようにとび込んできたのでした。

(熊沢夕輝子)

エルスター文庫について

エルスター文庫は、昭和52年度文部省助成金で購入され、独文学科に備え付けられた。

18世紀から20世紀初頭にかけて書かれたドイツ文学のコレクションである。その中から、日本でも良く知られている作家を、具体的に挙げてみよう。古典主義の礎レッシング。「シュトゥルム・ウント・ドラング」の生みの親ヘルダー。ドイツ文学の双璧であるゲーテとシラーは、他の文学者に依る研究書の類だけである。浪漫主義は、ドイツで起った芸術運動であり、文庫の中心と言えるくらい、コレクションも多い。理論的指導者シュレーゲル兄弟。ティーク（長靴をはいた牡猫—1797）、ノヴァーリス（青い花—1799）、グリム兄弟（ドイツ伝説—1816~18）等々。小市民文学派「ピーダーマイヤ」のメーリケ（プラークへの旅路のモーツアルト—1855）、政治的詩人グループ「若きドイツ」のハイネ。写真主義作家も多い。シュトルム（みずうみ—1850）の出た時代である。これを過ぎるとコレクションも急に少なくなって終る。

この文庫には、巨匠で古典的作家であればあるほど蒐集されている作品は少ない。レッシング、ヘルダー、ヘルダーリングがそうである。その代り、多数の無名の作家たちの作品が、1点、2点と集められている。1冊の文学史では説明がないか、

あっても簡単に触れられている作家たちである。大部な人物事典によると、ある作家は、自らは地道な文学活動に専念し、後世に残るすぐれた作品を生み出す影の力となった。ある作家は、生前中その作品は、ヨーロッパ各国やロシアで読まれ、全集も出している。今でいう流行作家である。

エルスター文庫は、文学史の隠れた部分を伝えてくれる。とくに日本においては、遠く離れた時間と空間を埋めてくれる文学史研究の上で貴重なコレクションである。

(橋奥雅子)



参考室あれこれ

●「渥美かをる遺稿集を探しているのですが……」との質問を受けた。

目録室の和漢書著者書名目録をひく。渥美かをるのカードは5枚。しかし、遺稿集という書名、言葉は見当らない。国会図書館の目録にも出てこない。昭和52年に亡くなったとのことで国文学関係の研究文献と国文学界の動向を示す資料を収めた「国文学年鑑」の昭和53年版を見る。執筆者索引から該当頁を開く。遺稿集という書名はない。昭和54年版を調べる。やはり執筆者索引から該当頁を開くと「軍記物語と説話」の解説の冒頭に著者の遺稿集とある。再度図書館の目録をひく。国文学研究所蔵とわかる。

●求めている本を著者名あるいは書名でひいてみて、カードが見つければカウンターへ直行！いつもそうなら問題はありませぬ。書名が曖昧であったり、引用文献の記述が間違っていると、所蔵されている本でも探し出すことができません。

▷必要な資料・情報を探しているとき……

▷資料が図書館にないとき……

▷書誌・目録類の使い方がわからないとき……

気軽にご相談下さい。資料を探すお手伝いをいたします。ただし、回答はあなた自身で出させていただきます。

●昨年度の質問の中から、いくつか選んでみました。

- 第1回国連軍縮総会の報告書を見たい→月刊国際問題資料 1978年8月号
- 東京都の年令別人口は→東京都統計年鑑
- アメリカの州別人口は→The Statesman's Year-Book
- ジンバブエはどこにあるか→世界年鑑
- 竹島問題について→日本の領土問題に関する最近の主な雑誌記事(図書館作成)
- 原子炉「もんじゅ」の公開ヒヤリングの記事→毎日新聞 1982年7月7日夕刊
- 「Q ERKEZKÖY」は何語で何という意味か→トルコ語→Turkish—English Dictionary.

(久保田安子)

お知らせ

○夏休み中も図書館を利用できます！

7月21日(木)から9月22日(木)まで、次のとおり開館しています。

平日 8:50~16:30

土・日曜日 休館(9月3、10、17日は12:00まで開館)

○夏休み、のんびり本を読みましょ

7月7日(木)から9月22日(木)までに借り出すと、返却期限は9月26日(月)から10月7日(金)の間になります。冊数は平常と同じ3冊以内。大学院生や4年生で7月7日以前に1ヵ月貸出しを受ける場合は、早めに更新手続をすると便利です。

○文献複写サービスについて

2階のカウンターで受け付けています。複写対

象物は図書館および各研究室備え付けの資料に限ります。料金は1枚30円。受け付け時間によって引き渡し時間が異なりますので、あらかじめ時間を確かめてから申し込んで下さい。

○本の「予約」ができます

一部の資料に利用が集中することがあります。借りたい本をすでに別の人が借りているとき、次に借りる権利を確保することができます。

○DO YOUR BEST!

前期試験が近づいてきました。この期間、図書館はたいへん込み合います。ロビーや閲覧室で、他人に迷惑をかけるようなおしゃべりは禁物。また、開架図書室や参考室の本を手にしたら、必ずもとの場所に戻して下さい。日頃から図書館の使い方慣れておくことが、何よりも大切です。

来ぶらり No.1 1983年7月1日発行

学習院大学図書館 〒171 東京都豊島区目白1-5-1 Tel.(986)0221